



同志社人物誌 (28)

柏木義圓

伊谷隆一

季子入ル、妻蚊帳ノ処へ来リ寝ズ——

十時就寝、季子八時二寝、十時、一時、四時セリ無事

淡路ヨリ〇 新報来ル

六月十五日 土 晴

五時起床、掃除、明日の用意、昼食ヲ作り跡片付、会堂掃除。

「浮世ノ重荷」や雑誌ヲ見ル、夕食ト跡片付、寛吾の荷物ヲ大四郎ヲシテ停車場ニ持チ行カシム、妻ト大四郎ト反目衰レむ可し、九時半就床、季子二十時セシム、二時迄ノ間ニ失策、二時着物ヲ換ヘシム。

ムツコヘム 高崎中学より〇 ムツ、大四郎より〇 うた子より〇 世界来ル

七月十日 (水) 晴、夕方より大夕立、雷雨

四時起床、祈禱、日課、掃除洗物、七時頃出デ原市太田氏ヲ訪フ、主ノ御力ニ依テ慰メラレ希望ヲ以テ居ラレシヲ感謝ス、御老母七十五才炊事ヲセラルルト、亡母ノ事ヲ憶ヒ出デ無量ノ感慨、糸杉氏ヲ訪ヒ坐子姉ノ信仰ノ事ナド語り秋間伝道ノ路ヲ開ク事ヲ誠シムト云ハル、午食ノ御馳走ニナル、茄子シギヤキ

柏木義圓日記数葉

大正七年六月十四日 金 晴時々小雨

五時起床、季子ノ洗物、焚キ物ノ辺ヲ掃除二階掃除、妻ノ粥ヲ煮豆ヲ煮ル。大四郎故ナク怒テ遅刻、軍物ヲ洗濯ス。午前月報ヲ書ク、十一時半ヨリ風呂場ヲ掃除し風呂ニ水汲

ム。子供ニ昼食セシメ跡片付ヲ為ス。妻今日午食ヲ廃ス。哲郎君大ニ宣シキトノ処再ビアシクナリ其容態下ノ如し、心甚タ傷ム、病名早発性痴呆症、誇大妄想多甚、行為常規ヲ失シ自他ニ危害ナキヲ保セズ依テ監禁治療ノ要ヲ認ム 福良警察署長ノ許可ヲ求メル由——以下一行不明——人參湯ヲ立テ妻ト八千代ト

ハ初物。笠原老兄ヲ訪フ、其空虚ヲ語ラル、坐古姉ノ話ヲ為シ、保羅身ニアル刺ノ傲レル心ヲ打ツ為ナリシヲ感謝シツ語ル。恐レイッ³タト云ハレタリ。——数字不明——湯淺氏ヲ⁴訪ヒ当分日曜夜ノ集リヲ休ム事ヲ定メ半田氏ヲ訪フ、山崎氏ノ前途憂フ可レ、中村氏ヲ訪フ、桑杉氏ノ寄付金五円渡ス、室橋氏ヲ訪フ、

帰テ夕食ヲ作ル、夕雷雨ノ為メ電燈ツカス八時頃寝タレドモ十二時過マテ眠ラレズ

季子失策

ケイセイ社ト印刷所ヘ△

ベ氏より○ 教師会より○

十月一日 火

五時起床

十時頃妻突然発病容体ナラズ検査場ニ居ラル内田しも子嬢ヲ頼ミ医師ノ方ヘ走テ貰フ、井上・小川両国手来ラレ内田氏馳ケ付ケ御世話下サル

夜林医学士来訪、見ユルカトキカレタレバ見ユルト云ヒ唯眼ヲ開クト怖ロシイト云ヘリ、林さんハ帰りガケニ予ニ昼ヨリハヨキヤウナリト申サレ絶望の事ハ申サレザリシ。

其夜内氏角子姉、松子姉徹夜看病シテ下サル。

太田氏、山本宗一氏ヨリ△

十月二日 水

午前十時頃茶ヲ飲ムカト問ヘバウナヅキ茶ヲノミ、何事カ云フタレドキキトレザリシ、葡萄酒ヲ少しノマシム

ソレヨリ人事不省ニ陥リタレド唯眠リ居ルノト思ヒ居タリ、六時前角子姉容子変リシト申サルル故往テ見レバモハヤコトキレント為シ居レリ。大四郎等大声アゲテ泣ク、子供ヲ集メテ讚美ヲ唱ヘ祈ル、其夜角子姉文枝さんいつこさん内田氏通夜セララル、十二時頃策平トムツ子来着。

十二月十八日 水 暖和

今日ハ至テ暖和、床ヲ出デ机辺ヲ整理シ読書ナド為ス。整理セル中、二十八年前未タ偕ニナラサリシ時与ヘタル(心臓病ヒキ)書状ノ、かや子が写シタルモノヲ見出し今昔ノ感ニ堪ヘズ、又岡部夫人が昨冬かや子ニ与ヘラレタル書状アリ其中ニ既ニ季雄ヲ貰ヒタキ意志書カレアリタク、又博平君ヨリ父ノ遺言トシテ一千五百円贈与ノ書状アリ、大切ニ保存ス。

今日ハ終日起キ居タリ、夕刻松井七郎氏ヨリ葉書アリテ明十七日ヨリ和解ノ大運動ヲ為サントアリ、和解トハ何ソ、斯ル事ヲ為シテ永遠ニ同志社ノ前途ヲ誤ラサランコトヲ望ム、同志社ノ為ニ祈リヲ捧ゲ⁶

夜母上ノ事ヲ憶フテ後悔ニ堪ヘザリキ

今夜ハ小水平素ノ半バ以下、暁方足ノ先キ

ダルクアリタリ

今日ヨリ中学校試験、大四郎等十二時半ニ帰ル

策平ヘ△ 七郎氏ヨリ△

十二月二十八日 土 曇

六時起床、祈禱、静坐ヲ試ム、午前「君主団体ト民主主義」起草。寛吾高崎ヘ往ク、七十五銭ノ皮表紙ノ日記帳ヲ購ヒ来リ策平ニ換ヘテ来イト云ハレテ不機嫌。

屑屋ニ売物ス、靈潮来ル、印刷代滞リテ八月号ハ差押ヘラレ爾来休刊今月発刊シタリトアリ、高橋氏ノ困難察ス可シ

赤井氏今年ハ御両親ト男女二兄ヲ喪ハレタリト、二月訪問セシトキ多クノ病者アリシト聞キシガ実ニ悲酸ノ事ナリ

屑ヲ売テ二円八十銭ヲ得タリト、廃物利用セサル可ラス、三時頃少シク××(不題)

寛吾偈高キ日記帳ヲ買ヒ来リ策平ニ小言ヲ言ハレ快タトシテ居リシガ、四時三十八分ニテ高崎ニ往キ五時三十五分ニテ帰り、日記帳ヲ返シ更ニ大四郎ノ分ト二冊安偈ノモノヲ購フテ来レリ

小田さんヨリお餅ヲ貰フ、九時就寝

淡路へ△ 綱島氏ヨリ○ 赤井氏より△

*

大正十一年十一月二十日 晴 四十三度

終日家に在リ、和田さん来訪、夕方一書生絵を売りに来ル、氣ノ毒ニ思フテ一円デ浅間ノ絵ヲ購フ。

夜和田さんノ演説ヲキク落チツイテ淳々語ラル感服。

玉やへ△ 田中良一氏より○

十一月二十五日 晴 五十三度 四十七度
九時頃原市へ、先ツ今作君ヲ訪へ一寸ハヤオヲ訪フ、安中警察へ往キントテ在、半田さん木村清松さんヲ訪フ、御集り中、実ニシンミリシタ少数ノ集リ、再ヒハヤオヲ訪フ、未タ帰ラス、十時半頃帰宅。月報執筆ヲ止ム可ク決心ス、今ノ如キ政府ノ下デノ執筆ヲ好マス。十一時頃警察ヨリ迎へニ来リテ往

ク、イロイロ尋ネ始末書ヲ書キ調印セシム、四時頃ニ及ブ。ハヤオ十時頃ヨリ来リ五時ニ及ブ。イヨ／＼月報編輯ヲ止ムルコトニ決心。ハヤオ、カンゴト共ニ原市へ

三十日 晴

カンゴ十一時頃帰宅、午後又中ノヤへ警官来リいろいろ聞ク、蓋シ告発スルナラシ聖旨ノ儘ニ為シ玉へ

十二月二日 晴

「中ノお隣リ御名前忘レタリ」某君御死去御見舞 父上トしはし話ス。内田十次君来訪³ 周、桜井、菅井、武林、ハヤオ諸氏来リ月報ノ将来ノ事ナドニツキ語り合ヒ凡テ任カス。

海老名氏大怪我御入院中ト。カンゴ室田へ祈禱会、省三さん司会、予モ感語。

祈ルモノ省三さん、私ト村富さん、十三名、有田屋ニテ

海氏へ○ 加延氏、中セ古氏、中山氏、福長氏、青柳氏、不二男さんへ△ 江川さんより○

四日 晴

終日家に在リ、何も為サズ、ウツ／＼タリ。

(以上原文のまま、判読不明のものには不明と付した)

〔註〕 くわしい註釈はさし控えるが、そのいくつかを記して置く。読んでわかるとうり、日録にはおびただしい人名が登場して来る。その全てを満足に追跡しえたわけではない。安中教会の無名のキリスト者についてはいまだ全くその確認が出来ていない。

〔大正七年関係の註〕

1 原市教会員 2 妻かや子実家、平瀬
3 湯浅治郎 4 原市教会員半田善四郎
5 岡部夫人とあるのは、高崎教会牧師岡部太郎夫人のこと、十一月四日の日記に「今夜岡部氏来訪、季雄ヲ貰ヒ受ケント申し出ラレ其ノ深切ニ深く感銘」とあり、末子季雄(六才)を手離すことに決心するのであるが、妻かや子はその病弱の故にか、以前に、その話を受けていたと思われる。ちなみに十一月二十三日の日録は、季雄との別れを次のように伝えて

いる。

「今日季雄、寛吾ニ伴ハレテ元氣ヨク信州へ出立。アア今日限り彼レノ可愛キ顔ト愛ラシキ声トハ永久ニ我家ニナクナリタリ、予ハ床上ニテ彼レノ手ヲ握リ、神様ニ事ヘヨ、ヨイお父サントお母サンノ処へ往クノダカラ神様ヲ信ジテ善イ子ニナレト云ヘバ、彼レハ唯元氣ヨク為シ居タリ、昨日マデ枕頭ニ来テ飴ヲナメ居タル姿目ニ見ユルヨウナリ、アア季子ヨ、父汝ヲ恋フ、汝居ラヌナライト淋シ、併し汝ヲ彼ノ地へ送ルハ汝ノ将来ノ為メト信ズレバナリ」

6同志社総長原田助の去就をめぐる事件、この事件に対する柏木の原田助批判は苛烈を極めてゐる。

7家族構成

季雄(二十六才)エール大学在学中

策平(二十四才)千葉医専

大四郎(十九才)高崎中学五年

寛吾(十七才)同三年

睦子(十五才)横浜英和女学校

七羊(十二才)安中小五年

八千代(十一才)同四年

季雄(六才)日記中季子とあるのは、季雄の愛称か。

8 網島梁川

〔大正十一年関係の註〕

大正十一年、九月、十月、十一月の月報それぞれ発禁、十二月四五九号を出して廃刊する直前にあたる。

1 ハヤオ 柏木季雄、原市教会牧師(柏木の長子)

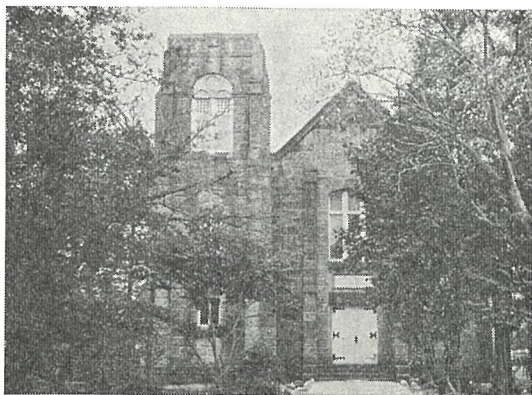
2 カンゴ 柏木寛吾、安中教会牧師(柏木の五男、昭和十年六月より父義圓のあとを受けて安中教会を牧す)

3 周再賜 共愛教会牧師

4 桜井乾一郎 前橋教会牧師

5 菅井吉郎 高崎教会牧師

この三氏が季雄、寛吾と共に「月報」廃刊後「新生命」と改題して昭和十六年六月まで月刊の新聞を刊行、月報よりの通巻五一七号。のち昭和十八年十月まで「群馬教壇」を刊行す。「新生命」「群馬教壇」と戦時下の安中教会、そして義圓―季雄―寛吾の血脈については別に稿を起こす用意がある。



義圓の牧した安中教会

6 菅井吉郎には、未公刊の柏木義圓伝があり、今、私が手元にお預りしている。四〇〇字一〇〇枚弱のもので、唯一の義圓伝「顕信録」に比し力こもったものである。ことに晩年の記事はくわしい。

7 武林愛一郎 足利教会牧師。

8 海老名弾正 海老名は翌十二年。八十才にて没す。

9 田中 省三 安中教会金蘭青年会創立者、当時安中教会の中軸、湯浅治郎の有田屋に勤務。

10 加藤延年 11 中瀬古六郎 12 中山光五郎

13 加藤不二男 14 江川栄（現安中教会牧師）

その他△は葉書、○は手紙の意

なお柏木義圓年譜は、拙著「非戦の思想——土着キリスト者柏木義圓」二（紀伊国屋新書）巻末の年譜を参考に供されたい。

*

私はいまここに柏木の日記から二つの時期を選びだし、その数葉を紹介した。

一つの時期は、柏木の生涯を通じて、くらし人としての最も苛酷を強いられた苦難の時代であり、今一つの時期は、死の一年少し前、「上毛教界月報」を廃刊するの止むなきに至る落暉の時である。いづれも日録は痛恨の氣に満ちている。

私は始めて、一字々々を指で追いながら柏木の二十数年間の日録を読み終え、そのくらし人としての勁さと、今の私の年令からは二倍にも三倍にも達しようとする在野の牧師が、その老軀に鞭うって生きるそのすざまじ

い生きざまを思い、わななく心を押えることが出来なかった。

非戦の人としてのみ知られている柏木の、しかしくらし人としての困憊^びし尽くした姿のなかに、むしろ非戦を非戦たらしめの生の論理が秘められている。それはハイカラに素早く世を見ていくのではない勁さを持っている。

ハイカラに素早く世を見ていく者は今も昔もごまんといるが、それらの末路はもはや見えていく。卑少な日々の自責や痛憤や、そしてささいな喜びを、愚俗とは自ら決断し覚悟するものだのとらえるその根底において思想の強力に逆転しえた人は、今も昔も数えるほどしかはいはないのである。柏木が、世に逆らうたから、社会的発言を多くなしたから偉いというのではうまくないと思う。例えば柏木が日露開戦の日記した次のような条は、今もやはり重いのである。

「宗教家にして愛国の念止み難く国家の為に銃剣を執て起つ、可なり。国家的観念に訴へて国家の士氣を振作する亦可なり。」

唯、その国家の為に平和主義の宗教をさへ戦争煽揚の具に利用するに至ては、之れ亦宗教の賊と謂ざる可らず。」（月報明治三十七年十月）

国をおももの念止み難ければ銃剣を取って起つもよし。この断定は、なまなかな知識人のものではない。人の事蹟をではなくその生命を、高く越えようとせねばならぬと思うのは、このような重い条に直面した時である。

〔註〕 柏木義圓の日記は未公刊であり、今微力を尽くしてその公刊を急いでいる。為に、十分な論をここに展開することが出来なかった。

なお、柏木義圓著作集を刊行することになっているが、その中に書簡を収録したいと念じおるも柏木の出した書簡が、家族宛のもの外、数通をしか蒐集出来ずにいる状態です。お持ちの方心あたりのおありの方は、恐縮ながら左記へ御一報ありたく存じます。

京都市南区西九条南田町一
九条公団八一号

伊谷 隆一
（大学院〈新聞学〉在学中）